

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association of breastfeeding with caregiver-reported physician-diagnosed allergies in children: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

母乳育児と養育者が報告した医師の診断による子どものアレルギーとの関連:エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pediatrics

年: 2026 DOI: 10.1186/s12887-026-06864-w

筆頭著者名: 稲寺 秀邦

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

生後 6 か月までの母乳育児の状況と児の 6 歳までのアレルギー疾患との関連を明らかにする。

方法:

生後 6 か月までの母乳育児の状況を、完全人工乳(I 群)、母乳 6 か月未満(人工乳を与え、かつ、母乳を与えた期間が 6 か月未満)(II 群)、混合栄養(人工乳は与えつつ、母乳を 6 か月間継続)(III 群)、完全母乳(IV 群)の 4 群に分類した。医師の診断による 4 つのアレルギー疾患(気管支ぜん息、アレルギー性鼻結膜炎、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎)の罹患状況は質問票により取得した。両者の関連について、共変量で調整した後、リスク比を直接推定するために Poisson 回帰モデルを用いた多変量解析を行い、I 群を基準としたリスク比を算出した。

結果:

完全母乳(IV 群)は 1 歳、2 歳時点の気管支ぜん息、および 2 歳時点でのアレルギー性鼻結膜炎の 1 年有病率が低いことと関連していた。一方、母乳 6 か月未満(III 群)、混合栄養(IV 群)は 1 歳、2 歳時点での食物アレルギーの有病率が高いことと関連しており、男児の IV 群では、この関連が 3 歳時点まで認められた。

考察(研究の限界を含める):

医師が診断したアレルギー疾患の罹患状況は母親への質問票に基づいたものであり、正確でない可能性があり、生後 6 か月までの母乳育児の状況は、6 か月時点の質問票に基づいているため、思い出しバイアスが入る可能性がある。また離乳食の導入時期やその内容を把握していないため、食物アレルギーの発症との関連については考慮されていない要因がある。解析結果は 1 年有病率に基づくものであり、累積的な発症リスクを示すものではない。さらに、観察研究であるため逆因果関係を否定できず、父親要因(アレルギー歴など)や多重比較による偶然の関連を十分に考慮できていない点が限界である。

結論:

生後 6 か月までの母乳育児の状況は、生まれた子どもの 3 歳までのアレルギー疾患の有病状況と関連していた。その関連には子どもの性別による差が認められた。